

僕が家庭科教師になった訳

小平陽一



はじめに

1994 年に、高校家庭科はそれまでの女子のみ必修から男女共修の教科に変わった。この年に、僕は女子大に 1 年間通い、家庭科の教員免許を取得した。そして、その翌年から、18 年間教えてきた化学の教師から家庭科へと転科した。以来 16 年、家庭科の教師として教壇に立ってきた。

化学から家庭科へ移った理由は大きく二つあった。一つは、それまでやってきた現代科学というものに疑問を感じ、暮らしの目線から考える科学を求めて生活科学を志向したこと。もう一つは、共稼ぎで二人の子育てをするという悪戦苦闘の私生活の中で、男も女も変わりなく生活能力の必要性を痛感したからである。

本レポートでは、後者の理由に重きを置き、僕が「これぞ男の世界」と思い科学を志向してから、やがて女の領域とされていた「家庭科」に方向転換した過程を振り返り、自らの内なる変革を社会変化とともに考察したい。併せて、家庭科という世界に入って見えてきたものや、男の家庭科教師の目から見た男女平等のあり方を考察してみたい。

I. 家事と子育てに悪戦苦闘

1. 理科が好き

小学生の頃、「どの教科が一番好き？」と聞かれたことがあった。僕は迷わず「理科」と答えていた。それは、男子は「理科」が好きで得意な方がカッコいいと思っていたからだ。その頃、鉄腕アトムというマンガが人気を呼んでいた。そこには、高層ビルの間をぬって、空中を自由に飛び回る未来の車が縦横に走っていたり、透明な大きなチューブの中をカプセルのような乗り物が走っていたり、夢のある近未来社会が描かれていた。僕は、きっとこんな将来が来ると科学に夢を馳せていた。

中 3 (1964 年) の時、日本初のオリンピックが東京で開催された。これを契機に、高速道路が造られ、新幹線が造られ、白黒テレビがカラーへと変わっていった。当時、日本の高度経済成長の絶頂期、日本の戦後の経済復興と科学・技術のレベルの高さを世界中にアピールした象徴的なイベントだった。その様子が、僕の目には、鉄腕アトムの世界が次々と現実のものになっていくように映っていた。

高校の時、僕の夢は化学系の企業の研究員になることだった。そして大学の理学部化学科・

☆続きは『2013 年度「日本女性学習財団賞」受賞レポート集 学びがひらく vol.3』で！

http://www.jawe2011.jp/publish/gaku/201403_report.html